

がんばれラングドックのバイオワイン

パリでは2月下旬から、恒例の国際農業見本市が開かれていた。牛や羊など3000以上の動物が会場に運びこまれ、1000を超える出品者がチーズやソーセージ、ワインなど各地の特産品を披露するフランス最大の農業サロンだ。

国を挙げた一大イベントであり多くの政治家が集票目当てに顔を出す。開催初日に訪れたサルコジ大統領は、またもや暴言をはいて注目を浴びてしまった。市民に囲まれ握手をしていた大統領は、市民の一人に「触るな」と言われたことに腹を立て、「うせろ、ばかやろう」とやり返した。後日、サルコジ大統領は「相手にしなければよかった」と言動を悔やんでいたが、支持率が落ち込んでいるからだろうか、苛立ちと疲れが見える。

暴言騒ぎで開幕した見本市だったが、天候にも恵まれ9日間で60万人の市民が訪れた。初めて会場を訪れたヴァンサン・コストさん(52)と妻のフランソワーズさん(51)は、広い会場を歩き回ってフランス農業の奥深さをあらためて感じたという。実はこの夫婦、南フランスのラングドック地方ヴァン・ド・ペイ・ドックのバイオワイン生産者で、この見本市に初めて参加した出品者でもあった。

コスト夫妻のブドウ畑は、パリから南へ740キロ、カンヌ・エ・クレランという人口300人ほどの山間部にある。およそ30ヘクタールの土地で無農薬有機農法のブドウを栽培し、年間20万本のバイオワインを生産している。自然と身体に優しいワインを造りはじめたのは1990年、バイオワインが注目される前のことだった。「土とブドウに敬意を払うと、この農法に行き着いた」と動機を語る。この土地は一族が22世代前から住み続けているところで、一年中穏やかなそよ風がふき、石灰質と粘土質の土に恵まれている。祖父母の代でブドウ栽培が中断されていたが、夫婦2人で苗を植え、ブドウ畑を作り直した。

初めて参加したパリの農業見本市は「難しかった」というのが正直な感想だ。ポルドーやブルゴーニュなど知名度が高い地方の出品者は6本入りの箱売りで大量にさばくが、コスト夫妻は一本ずつ買い求める個人も拒まない。環境問題への関心が高まりバイオワインの需要は伸びているが、見本市で収益をあげるのは難しい。

バイオワイン作りは手間がかかるうえ、天候に左右されるため生産を断念する作り手も少なくない。コスト夫妻も、通常のブドウ栽培より20%多く経費がかかること実感しているが、夫婦二人三脚で難局を乗り切ってきた。これからも先祖から預かった大地に根を下ろし、「地球を汚さない」という信念を貫いていく。

(mainichi.jp 2008年3月4日掲載)